ミャンマーの麻薬地帯の消滅のための活動

生活環境研究センター教授　佐竹　元吉

▲ケシ栽培から農業へと転換希望しているマルウ族の部落
病院を背景に小学校の生徒との記念写真

麻薬（ケシ）や覚醒剤は身近にないようですが、今では覚醒剤の低年齢の使用が広がってきています。国連麻薬委員会の発表によると薬物乱用状況は世界的に悪化傾向を示しており、国連のデータでは二〇〇〇～二〇〇一年の世界の薬物乱用者数は約二億人と推定されています。薬物別には、大麻乱用者が約一億六二〇〇万人と最も多く、次いで覚醒剤乱用者が約四二〇〇万人、あへん系麻薬（ケシ）乱用者が約一四〇〇万人、コカイン乱用者が約一四〇〇万人と推定されています。

乱用薬物のうち覚醒剤は世界で二番目に多く、その乱用者数は世界人口の約〇・七％を占めています。地域別には、アジア二二〇〇万人、欧州六〇〇万人、北米六〇〇万人、南米三〇〇万人、アフリカ二二六万人、オセアニア一一八万人と推定され、アジアが最も多くなっています。アジアのなかでアンフェタミン系興奮剤が乱用薬物の一位となっている国は、フィリピン、タイ、日本などであり、二位は、中国、インドネシア、オーストラリアなどがあります。アジアにおける覚醒剤の乱用は憂慮すべき深刻な問題となっています。

▲研修薬草園（ミャンマーカチン州セイロン村）

タイ、ラオス、ミャンマーのこの地域はゴールデントライアングル（黄金の三角州）と呼ばれ、麻薬（ケシ）の生産地となっています。

ケシの栽培者は、山岳の少数民族の人達です。少数民族の部族の維持には欠かせない収入源となっています。この人達に、ケシ以外の植物を植えて、麻薬から手を引いて貰う試みを、本学の生活環境研究センターで行っています。これは、ミャンマー政府の許可の下で、国連麻薬委員会、厚生労働省、日本大使館と連携して行っています。また、この研究は、「ミャンマーにおける少数民族の生活環境に関わる伝統的知識の科学的解明」として今年度の科学研究費補助金（基盤研究費(B)）に採択されました。

この研究の主な内容は、ミャンマーの山間部に薬用植物園を作ることです。そこで、地元の人達に、三年間の栽培技術の研修を行い、修了後、種苗を与えて、ケシ栽培地で新しい薬草や果樹を栽培してもらいます。

研究では新しい資源植物の探索も行っています。ミャンマーのトリュフ類やツクバネソウ類の成分研究を行っています。

昨年、生活科学部の四年生二人がミャンマーの研修活動に同行しました。研修現場はミャンマーの山奥にあり道路はでこぼこで、その上、民族紛争のある地域だったため、今回の研修活動にはミャンマー国軍の護衛が付きました。

研修現場では約百種類の植物が導入されていました。今回の視察で導入されたほとんどの植物が生育良好でした。その他、ミャンマーの野生ラン、薬用ニンジンなど多くの薬草も見つかりました。

研修に同行した二人の学生はミャンマーの食事情とトイレ事情の調査をし、大変面白いレポートを提出しました。食事情調査をした矢澤さんは、竹筒を使ってご飯の炊き方を習いました。トイレ事情の調査をした赤石さんは、ミャンマーのトイレと水飲み場が近いことから日常用水が大腸菌で汚染されていることを調べました。

ミャンマーは民主化の問題で国際的に孤立していますが、親日的な国民性で私達の活動も順調に動いています。新たな研修現場として第二カチン独立軍の地域にもニンジン、ベニバナ、モモなどの栽培地ができました。

▲軍の警備員とプロジェクトチーム